

牧会者の生活—大グレゴリウス『牧会規定』第 2 部⁽¹⁾—

菊 地 伸 二

第 1 章

しかるべき仕方で指導職に到達した人は、その職において自らをどのように示すべきか

牧者の生活がその群れから隔たっていないように、同様に司教の行いは民衆の行いを超えていなくてはならない。実際、民衆がその群れと呼ばれているそのことから、正しさを保つという必要性にどれほど義務づけられているかを熱心に評価しようと試みなくてはならない。

したがって、かれは、思索においては清く、行いにおいては模範となり、沈黙においては慎重に、言葉においては有益に、共感においては誰に対しても隣人として、瞑想においては誰よりも高揚し、よい行いをする人には謙遜さをもって交わり、罪を犯した人の悪徳に対しては正義への熱意によって立ち上がり、外的なことで忙しくても内的なことへの配慮を減らすことなく、内的なことに熱心であっても外的なことへの関心を放棄すべきではない。

さて、短く数え上げながら触れたことを、少し詳しく論じていくことにしよう。

第 2 章

指導者は思索において純粹でなくてはならない

指導者は思索において純粹でなくてはならない。他人の心にもある汚れたところを落とすという職を引き受ける人が、いかなる汚れによっても汚されることがないためである。

じっさい、汚れたものをきれいにしようと配慮する手はきれいでなくてはならず、もし、汚いままで汚いものを求めつづければ、それが触れたとき、いっそう汚いものとなって辱められる。このことから、預言者を通して次のように言われる。「主の器を運ぶあなたは清くなくてはならない」(イザ 52,11) と。

隣人の魂を永遠の聖なるものへと導くために、

自らの信仰の交わりを通して引き受ける人が主の器を運ぶのである。それゆえ、自らの誓いの中心において、生きた器を永遠の神殿へと運ぶ人自身が、どれほど清くなくてはならないかをよく知るべきである。

このことから、神の声によって、アロンの胸に裁きの胸当てが紐で結びつけられ、取り付けられるように命じられるが、それは不安定な考えがけっして祭司の心を占めてはならず、ただ理性のみがそれに括られるべきであり、軽率なこと、無益なことを考えるべきではないからである。

他人の模範として立てられた人は、生活の重みによって、いつでも胸にどれほどの理性をもっているかを示さなくてはならない。その胸当ては、また十二部族の名前が彫られていることが注意深く加えられている。というのも、胸に先祖を書き加えることは、昔の人びとの生活を絶えず考えることだからである。

じっさい、先立つ先祖の例をたえず見、聖なる者たちの足跡を常に考え、不法な考えを押さえて、秩序の限界をはみださずに、行いの足どりを保つとき、祭司は非難されることなく歩むのである。

じっさい、裁きの胸当てと呼ばれるのは相応しいことである。それというのも指導者は、いつも注意深く吟味しながら、善と悪を区別しなくてはならないし、相応しいことは何かを、また、いつどのような仕方で相応しいかを、熱心に考えなくてはならず、自分にとってではなく、隣人にとっての善を自分に相応しいものとしなくてはならないからである。このことから次のように言われる。

「裁きの胸当てには教えと真理を入れる。それらは、アロンが主の御前に出るとき、その胸に帯びる。アロンはこうしてイスラエルの人びとの裁きを、主の御前に常に胸に帯びるのである」(出 28,30)。

たしかに祭司にとって、イスラエルの人びとの裁きを主の御前に胸に帯びるとは、従者たちの罪を、ただ内なる裁き主の意に従って吟味すること

で、神の役割に置かれていると見なしたものの中に人間的なものを混ぜ合わせて、私的な苦しみが是正への熱意を粗雑なものにすることがないようにするのである。

他人の悪徳に嫉妬することが示されたときには、自分自身のものを懲らしめるべきであり、そのようにして隠れた妬みが裁きの冷静さを汚したり、軽率な怒りが冷静さを惑わしたりしないようにする。しかし、すべてのものを支配している、すなわち、内なる裁き主の恐ろしさを考えれば、従者を支配することは、大きな恐れが伴わないことはない。その恐れは、当然のことながら、精神を謙虚にする間は、指導者を清めるものであり、そのようにして霊的な傲慢さによって持ちあげられたり、肉の喜びによって汚されたり、地上的なものへの欲望によってもたらされたり、歪んだ思考によって曇らされたりしないようにするのである。

こうしたものは指導者の魂に必ずや刺激を与えるものなので、それらに逆らうことによって打ち勝つために急がなくてはならない。暗示によって誘惑する悪徳が、快樂の柔軟さによって征服することがないように、また、これらのものが魂から追放されるのが遅すぎて、同意の刃によって殺されることがないようにすべきである。

第3章

指導者は行いにおいて模範的でなくてはならない

指導者は行いにおいて模範的でなくてはならず、どのように生活すべきかを、生きることによって従者に告げ、牧者の声と生活に従うその群れは、言葉よりも模範に従って歩まなくてはならない。

その立場の必要上、最高のことを言うことを求められる人は、この同じ必要から最高のことを示すことを強いられる。

じっさい、かれの言葉は、その言葉の実践によって推薦されるとき、より聴者の心に入り込む。というのも、言葉によって命じることは、それを示すことによって実際の助けとなるからである。じじつ、ここから預言者を通して、「高い山に登れ。よい知らせをシオンに伝える者よ」（イザ40,9）と言われる。すなわち、天上の説教を利用する者

は、今や地上の行いという最低のものを捨て、ことからの頂点に立つと考えられるべきである。生き方の功績を通して高いところから呼ぶとき、従者をより容易によりすぐれたところへと導く。

ここから神の法によって、祭司は肩と右足を犠牲のために受け取り、切り放す〔出29,22；26-27〕。かれの行いは単に有益であるだけでなく、卓越したものでなくてはならない。かれはただ悪人のあいだにあって、秩序という名誉の点で上回っているだけでなく、生き方という徳によって超えていなくてはならない。肩と共に胸が食用として与えられるのは、犠牲とするように命じられたことを、その同じものから創造主に捧げることを学ぶためである。

心で正しいことを考えるだけでなく、行いという肩によって、かれを見る人びとを崇高なところへと招かれなくてはならない。この世の繁栄を求めるべきではなく、逆境を恐るべきでもない。最内部の恐れを考慮して、この世のへつらいを軽んじ、内的な喜びへのへつらい（追従）を考えて、この世の恐れを蔑むべきである。

このことから、天上の声の命令によって、祭司は両肩に、肩掛けによってしばりつけられ、逆境でも順境でもつねに徳という飾りによって固められる。というのも、パウロの言葉によれば、ただ、内的なものだけを求めながら、最低の喜びという煉瓦に屈することがないとき、「左右の手に義の武器をもって」（二コリ 6,7）進むことになるからである。

順境によって人は高ぶってはならず、逆境によって混乱してもならない。なだらかなものが快樂へと誘うべきでなく、荒々しいものが絶望へと押しつぶすべきでない。

いかなる情念によっても精神の意図を低めないように、両肩に上からかけられた美がどれほどのものかを示すべきである。肩掛けが、金、青、紫、二度染めの緋色、ねじれた亜麻布によって作るように命じられているが、それは祭司がさまざまな徳によってどれほど光り輝かなくてはならないかを示すためである。

たしかに、祭司の服では、何よりも金色が輝いており、その人において知的理解力がとりわけ輝いていることが必要である。空の色として光彩を

放つ青色がその人に加わることで、理解によって浸透したことによって、低俗なものへの愛ではなく、天上への愛へと高めるべきである。

賞賛によって、不注意にも捕われないように、真理の理解そのものによって虚しくならないようにするべきである。

金と青にさらに紫が混ぜられるのは、すなわち、祭司の心は、その人が説教する最高のものを希望するとき、その人のうちに悪徳を暗示するものを抑圧しており、いわば、王の権力によってそれらを拒み、最も内奥の再生への気高さを見ながら、天上の王国への状態を生活によって守るのである。

この霊の気高さについてはペトロによってこう言われている。

「しかしあなたがたは選ばれた民、王の系統を引く祭司である」(一ペト 2,9)。わたしたちが悪徳を征服させるこの権威についても、「しかし言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人びとには神の子となる資格(権威)を与えた」(ヨハ 1, 12)と語るヨハネの言葉によって強められる。この強さの威厳について、詩編作者が、「神よ、わたしにとって、あなたの友だちが非常に名誉を与えられ、その支配は非常に強められる」(詩 138, 17)と言うとき、念頭に置かれている。というのも、たしかに、外見的には、軽蔑をこうむっているときでも、聖人たちの精神は、とりわけ最高のものへと高められるからである。

しかし、金、青、紫に二度染めの緋色を加えられるのは、内なる裁判官の目の前で、徳のすべての善が愛によって飾られるためであり、人間の面前で赤く染まっているものは、裁判官の目の前では、内なる愛の炎によって灯されるからである。すなわち、神と同時に隣人を愛するその慈愛は、いわば二重の染料によって光るのである。

したがって、創造主の美を喘ぎ求めながら隣人への配慮を怠る人も、隣人の配慮を求めるあまり神への愛が不活発になる人も、これらのうちのいずれかを怠ることになるので、外衣の飾りにおいて二度染めの緋色をつけることは知らないのである。しかし、精神が愛の教えに向けられるとき、肉は慎みを通して弱められることは疑いもないことである。

このことから、二度染めの緋色に、ねじれた亜麻布が加えられる。というのも、布は地から輝く美しさによって始まるから。そして布によって規定されるのは、清らかな身体の飾りによって輝く貞潔さに他ならないのではないか。そのねじれは、外衣の美しさに織り込まれるのである。というのも、慎みによって肉が疲れ果てるとき、貞節さは清らかさという完全な輝きへ導かれるからである。そして、他の徳とともに、弱った肉の徳が現われるとき、いわば多様な外衣の美の中で、ねじれた亜麻布は輝くのである。

第 4 章

指導者は沈黙する際も慎重に、言葉を語る際も有益でなくてはならない

指導者は沈黙する際には慎重であり、言葉を語る際には有益でなくてはならないが、それは、黙っておくべきことを口にしたり、口にすべきことを黙っていたりしないためである。じじつ、不用意な語りが誤りへと引きずり込むように、思慮を欠いた沈黙は、教育することのできた人びとを誤りのうちに残したままにする。

というのもしばしば不注意な指導者は、人間的な好意を失うことを恐れて、正しいことを自由に語ることに恐れをなす。そして、真理の言葉によれば、羊の群れに対する牧者としての配慮を熱心にせず、雇われた人のように捨てていく。じっさい狼が近づくと、黙って身を隠して逃げていくのである。

じじつ、主は預言者を通して、かれらを非難して言う。「口を閉ざされた犬で吠えることができない」(イザ 56,10)。

さらに、このことから不満を述べながら、こうも言う。「お前たちは、主の日の戦いに耐えるために、城壁の破れ口に上ろうとせず、イスラエルの家を守る石垣を築こうともしない」(エゼ 13,5)。

たしかに、城壁の破れ口に上るというのは、群れを守るために、自由な言葉でこの世の諸力に対抗することである。また、主の日の戦いに耐えるとは、戦いを挑む悪人に、義への愛によって抵抗することである。じっさい、牧者にとって正しい

ことを語ることを恐れるというのは、黙ることによって背中を向けたことに他ならないのではないか。たしかに、群れのために自らを差し出す者は、敵に対してイスラエルの家を守る石垣を築くのである。

このことからさらに罪人たちに言われる。「あなたの預言者たちはあなたにとって偽りの愚かなことを見ており、あなたの不義をあばいて、あなたを処罰することはしない」(哀 2,14)。預言者は聖書ではたしかにときどき師と呼ばれている。現在から逃避しようとする本性を指摘し、未来を明白にするからである。神の言葉によって、かれらが偽りのことを見ていたと告発される。罪を罵ることを恐れて、無益に、罪人たちに安心を約束してへつらったからである。かれらは譴責の声を黙することにより、罪を犯す人の不義を明らかにしなかったのである。たしかに譴責の言葉は、開かれていくことへの鍵である。なぜなら、それを行った人でさえ、気づかない罪を明らかにすることになるからである。このことからパウロは言う。「健全な教えに従って勧めたり、反対者の主張を論破したりするように」(テト 1,9) と。また、マラキを通して言われている。「祭司の唇は知識を保ち、口元では律法を求めらるる。かれは主人たちの主の使いなのだから」(マラ 2,7)。また、主はイザヤを通して忠告して言う。「止むことなく叫べ。あなたの声をラッパのように鳴らせ」(イザ 58,1)。司祭の職務を開始する者は、伝令の仕事を引き受けるのである。そのため、裁き主の到来の前に、恐れつつ従い、かれ自身叫ぶことによって歩むのである。それゆえ、司祭がもし説教することを知らないならば、この音のない伝令によって、どのような叫び声が与えられることになるか。こうしたことから、聖霊は、舌の形で最初の牧者たちの上に留まった。かれが満ちた人びとにすぐに語らせたのである。ここからモーセは、祭司が神殿に入ったとき、小さな鈴をもって歩くように命じられた。それはすなわち説教の声を持つということであり、高いところから見ておられる方の裁きを沈黙によって害さないためである。聖書に記されている。「かれが主の見ているところで、祭壇を出たり入ったりしたとき、音は聞かれ、死ぬことはなかった」(出 28,35)。じっさい、もし

音が聞かれなかったら、祭司は出入りしても死んだのである。すなわち、もし、かれが説教の声なしに進むならば、かれは自らに抗して、隠れた裁き主の怒りを引き起こすのである。

ところで小さな鈴は服に付けられたものとして描かれている。そしてじじつ、祭司の服はまさしく正しい仕事と受け取るべきではないだろうか。預言者は証言して言っている。「あなたの祭司たちは義をまとっているか」(詩 131,9) と。それゆえ、小さな鈴は服にくっついており、祭司の働きも言葉という音によっていのちの道を叫ぶのである。

しかし、支配者は語ろうと準備するとき、どれほど用心深く熱意をもって語るべきか、注意するべきである。というのは、もし整っていないのに語ろうと急いでしまえば、誤謬の傷によって聞く人びとの心を殴りつけることになるからである。おそらくは、かれが賢く見られるように望むとき、知恵の欠如によって一致という絆を切断する。このことから真理は語る。「あなたがたのうちに塩を持ちなさい。互いに平和に過ごしなさい」(マコ 9,50)。たしかに、塩によって言葉の知恵が示される。だから、賢く語ろうと努める人は、かれの語りによって聞く者たちの一致が混乱することを大いに恐れるべきである。こうしてパウロは語る。「自分を過大に評価してはなりません。慎み深く評価すべきです」(ロマ 12,3) と。

このことから、神の言葉に従って、祭司の服において小さな鈴にはザクロの実が加えられる。ザクロの実は信仰の一致に他ならない。というのは、ザクロの実のうちには、その中に、多くの種が外の殻から囲まれているように、信仰の一致は聖なる教会の数えきれない人びとを庇護しているからである。その中に、功績においてはさまざまな者を含みつつ。それゆえ、指導者は不用意に語ることへと邁進することがないように。すでにわたしたちが言ったことは、真理それ自身によって弟子たちに語られている。「あなたがたのうちに塩を持ちなさい。互いに平和に過ごしなさい」かれは祭司の服を比喩的に用いながら、「ざくろの実を小さな鈴に結んで、あなたがたが語るすべてのことを通して、信仰の一致を用心深い遵守によって保つように」と言っているようである。

指導者はまた悪いことを言わないだけでなく、

正しいことが過度に、また不適切に言われないうちに、注意深い配慮によって気をつけるべきである。というのは、言われたことの力は、不注意な語りによって聞く人びとの心で弱くなってしまふからである。じっさい、この種の語りは、話し手を損なってしまう。それは聞く人びとの実際の必要性に注目しないからである。そのことからモーセは適切に語っている。「種に欠損のある者は不浄な者となる」(レビ 15,2)。というのも、聞く人びとの心において、思想の種は、かれらが聞いたところの性質によるから。聞くことを媒介として話を受け取ることで思想は心に生まれるのである。そのことから、偉大な説教者は、この世の賢者たちによって言葉の種を蒔く者と呼ばれるのである(使 17,18 参照)。それゆえ、「種に欠損のある者は不浄な者となる」。

かれは多くのことを語ることを与えられていて、もし話すことにおいて適切であれば、聞く人びとの心に正しい考えを生み出すことができたであろうという事実によって、自らを損なっている。同様に、不注意な語りによって拡散するときは、かれは種を子孫のためではなく、不浄さのために注ぎ込んでいる。このことからパウロもまた、かれの弟子に説教する際には、次のように忠告する。「神の御前で、そして生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現と御国とを思いつつ、厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても、悪しくても励みなさい」(二テモ 4,1-2)。「折が悪しくても」と言うときには、「折が良くても」ということが前提とされている。もし、折が良いということが折が悪いということと結びつかないならば、説教することは価値がなく、聞く人びとの心で自滅することになる。

第 5 章

指導者は一人ひとりに対して共感することにおいて隣人となり、なかでも瞑想においては高められていなくてはならない

指導者は一人ひとりに対して共感することにおいて隣人となり、なかでも瞑想においては高められていなくてはならない。敬虔さの内奥を通して、

他の人の弱さを自分へと移し、思索の高みを通して、不可視的なことを求めることによって自らをも超越しなくてはならないのである。そうでないと高いものを求める一方で、隣人の弱さを軽蔑したり、隣人の弱さに一致させることによって、高いものを求めることをやめたりしてしまうからである。

このことからパウロは、楽園へと導かれ、第三の天の秘儀を探求していて、不可視的な瞑想によって引き上げられたが、肉的な者の寝床へと精神のまなざしを呼び覚まし、親密な者の間でどのように振る舞うべきかを示しながら次のように言う。「しかし、みだらな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、また、女はめいめい自分の夫を持ちなさい」(一コリ 7,2) と。そして少し後では、「互いに相手を拒んではいけません。ただ、納得しあったうえで、専ら祈りに時を過ごすためにしばらく別れ、また一緒になるというなら話は別です」(一コリ 7,5) と言う。パウロはすでに天の秘儀に導かれながらも、謙譲の心によって肉的な者たちの寝床を探し回っていることは注目すべきことである。かれは自分自身は上にあげられ、心のまなざしは不可視的なものに向けられているが、共感の心をもって、弱い人びとの秘密へと向けるのである。かれは瞑想においては天を越えながら、肉的な者たちの寝床を配慮してないがしるにすることはしないのである。なぜなら、愛の絆によって、もっとも高いものと同様に、もっとも低いものとも結びついているからである。かれは、自分自身においては、霊の力によって力強く高いところに捕らえられているのであるが、敬虔さによって親切な心をもつことによって他人のうちに弱くされるのである。それゆえかれは言う。「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくならば、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」(一コリ 11,29)。このことからかれは次のようにも言う。「ユダヤ人に対して、ユダヤ人のようになりました」(一コリ 9,20)。このことをかれは信仰を捨てることによってではなく、敬虔さを広げることによって行ったのである。こうしてかれは、信仰を有していない人たちの個性を自らへと変形させながら、自分自身どのようにして他者に共感

すべきか、そして、どのようにしてかれが、かれらから自分に対してしてほしいことを、自分がかれらにすることを学んだのである。このことからさらにかれはこのように言う。「わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです」(二コリ 5.13)。というのは、かれはどのようにして瞑想によって自分自身を越えたとともに、その同じ自分自身が、聞く者に対する寛大さによってどのように柔和にしていくかを知っていたからである。

このことから、ヤコブは、主が上の方にもたれかかり、下の方に油の注がれた石があり、天使が登ったり降ったりするのを見た。正しい説教者は、上方の教会の頭、すなわち、主だけを瞑想によって求めるのではなく、下の方の、自らの民衆のところにも共感することによって降ってくるのである。このことから、モーセはしばしば祭壇を出たり入ったりした。かれは、内側では瞑想に捕らえられていたが、外側では弱き者たちの仕事に専念したのである。内側では、神の秘密を思いめぐらし、外側では、肉的な者たちの仕事を担ったのである。疑わしいことがらについては、常に祭壇へと足を運び、契約の箱の前で主に相談したが、こうして、疑いなくかれは正しい人びとにとっての模範例を提示し、外側で自分たちが行っていることに迷ったときには、いつでも祭壇のなかに、すなわち、精神の内へと帰ったのである。契約の箱の前で主に相談をしながら、自分たちにとって疑わしいことがらについては、内側の聖なる書物の巻物のうちに求めたのである。このことから、真理それ自身が、わたしたちの人性を取ることによってわたしたちに示されたが、山では祈りに固着し、町中では奇跡を行った。すなわち、善き指導者たちに模倣の道を示した。たとえ、最高のことがらを瞑想して求めているも、弱き人びとの必要性に共感しつつ憐れむのである。愛が高みへと驚く仕方があがるとき、隣人の内側に向かって、自らを憐れみ深く引っぱるのである。慈悲深く下の方へと降れば降るほど、力強く上の方へと帰っていくのである。

ところで、上に立つ人びとは、自分自身を示すことによって、仕える人たちもまた自分たちの隠

れたことをかれらに顕わにすることを恥ずかしがらないようにしなくてはならない。小さな者たちは、誘惑の波に耐えるとき、牧者の心に、いわば母の胸のごとく走り寄るのである。かれらは自分たちを叩きつけた罪によって汚れてしまったことを知り、かれの慰めの言葉や祈りの涙によって、自らを洗い流すのである。そのことから、神殿の扉の前には、神殿に入る人びとの手を洗う銅製の海がある。すなわちたらいであり、12匹の牡牛に支えられていて、その顔は見ることができるが、その隠れた部分は見ることができない。じっさい、12匹の牡牛は、牧者の階級全体以外の何を象徴するのか。このことについて、パウロは述べている。律法は言う。「あなたがたは、脱穀している牛に口籠をはめてはならない」(一コリ 9.9) と。わたしたちは、かれらが公然と行うことは知っているが、厳格な裁き主のもとで、隠れた応報として、後でかれらに取っておかれることについては知らない。しかし、隣人の告白した罪を清めようと、忍耐強く卑下して備えている人は、神殿の扉の前でたらいを支えているのである。そして永遠の門を入ろうと努める人は誰であれ、自らの誘惑を牧者の心に顕わにし、いわば牛のたらいで思考もしくは行為の手を清めるのである。

さて、しばしば起こることであるが、指導者の心は、かれの謙譲さによって他人の試練を学びながら、かれもまた耳を傾ける誘惑によって打ちのめされる。というのは、たらいの場合、そのことは、多数の清めによって仕えることとして言及されるが、たしかに汚されるからである。そこで洗う人の汚物を受け取ることで、その澄んだ清らかさを失う。しかし、牧者はこうしたことを決して恐れるべきではない。というのも、神はすべてのものを正確に量っているのだから、牧者が他人の誘惑によって共感的に打ちのめされればされるほど、誘惑から容易に解放されるからである。

第6章

指導者はその謙虚さによって善い行いをする人の仲間となり、悪しき行いをする人の悪徳に対しては、義への熱意によって厳しくなくてはならない

指導者はその謙虚さによって善い行いをする人

の仲間となり、悪しき行いをする人の悪徳に対しては、義への熱意によって厳しくなくてはならない。かれは自分を善に優先させてはならない。そして、邪悪な人の罪が要求してくるとき、自らの優越性をただちに主張すべきである。こうして自らの地位を払いのけ、かれは自らを善い行いをする仕える人と等しいものと考え、邪悪な人に対して義の律法を行使することを恐れてはならない。なぜなら、『ヨブ記講解』において、わたしは言ったことを想起しているように、本性はすべての人びとに等しく生じたが、罪科はそのさまざまな欠落によってある人を他のある人よりも下に置くこととなったからである。この多様性は、悪徳から生じたもので、神の裁きによって分配されたものである。その結果、すべての人間は等しくなく、ある人は他のある人によって支配されることになる。そのことから、上に立つすべての者は、自分自身のうちに、地位の権力ではなく境遇の等しさを考慮すべきである。また、人を支配することではなく、助けることを喜ぶべきである。

というのは、わたしたちの古の父祖は、人びとの王ではなく、動物の群れの羊飼いであったと記録されているからである。そして主はノアとその息子たちに、「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と言い、すぐに「あなたの恐れとおのきは地上のあらゆる獣の上にあれ」(創 9.1-2) と言ったとき、かれらの恐れとおのきは、地上の動物にあらかじめ言われていたので、人びとに対して行われることは禁じられていた。本性的に人間は獣よりも優れて造られた。他の人間に対して優れているのではない。したがって人間によってではなく、動物たちによって恐れられると言われている。明らかに、等しいものによって恐れられることを欲することは、本性に抗して他人に対して傲慢になることである。しかし指導者は、従う者が神を決して恐れないことを知ったときには、従う者によって恐れられることも必要である。神の裁きを恐れなきときには、これらの者は少なくとも人間的な尊敬から罪を恐れなくてはならない。

上位にあることで恐れを鼓舞するのは、自慢するためではなく、それによってかれらが個人的な栄光ではなく、従う者の義を求めているからである。じっさい、悪しき生活を送っている人び

とのうちに恐れを鼓舞するとき、上に立つ者は人間によってよりも動物によって支配されているかのようなのである。というのは、かれらの従者が獣であるかぎり、かれらは恐れによって下方へ広げられるべきであるから。

しかし、ときどき指導者は、他の人よりも傑出していると考えることによって膨れ上がることがある。そしてすべてのことが思いのままにあるため、また、命令がすぐに思い通りに行われるため、また指導者がよく行ったときにはすべての従う者は賞賛するが、悪い行いときには権力がないために批判しないため、時には咎められるべきことでも賞賛したり、下にいる人びとによって誘われて、かれの心が持ち上げられたりするために、膨れ上がるのである。

こうして、外側では絶大な好意によって取り囲まれながら、内側では真理によって空洞とされ、自ら忘れて外の声に自らを広げ、外で聞こえてくる自分を信じ、内で識別すべき自分を信じようとしなくなる。

かれは従う者を軽蔑し、かれらを本性的に等しいとは見なさない。自分は権力という運命によってかれらに優っており、生活の徳行によっても自分が超えていると信じている。自分の方が能力が豊かにあると見なしているいかなる人びとより、自分の方が賢いと評価する。

たしかに、ある頂の上で、自分で自分を評価し、他人の本性と等しい境遇によってしぼられている身ではありながら、他人と等しく見なすことを軽蔑するのである。このようにして、かれは、聖書で記されている人ようになる。「驕り高ぶるものをすべて見下し、誇り高い獣すべての上に君臨している」(ヨブ 41.26)。卓越した頂を求め、天使たちとの共同の生を軽蔑しながら言う。「わたしは北の方に王座を置き、いと高き者ようになろう」(イザ 14.13-14)。

それゆえかれは、外側では権力の頂において自らを高めながらも、自分の内側では驚くべき裁きによって墜落という陥穽を見出すことになる。人間は人間に似ることを軽蔑するとき、背教した天使に似た者となるのである。

こうして、サウルは、自らの謙虚さによって自分を際立たせた後、権力の頂という傲慢さによっ

て膨れ上がった。謙虚さによって前進していたが、傲慢さによって拒絶された。主は証ししながら言う。「あなたは、自分自身の目には取るに足りない者と映っているかもしれない。しかしあなたはイスラエルの諸部族の頭ではないか」(サム上 15,17)。かれは以前には自分のことを自分の目には小さき者と見ていたが、一時的な権力に頼りながら、もはや自らを小さき者と見なくなっていた。他人よりも自分を優先させ、かれらよりも力があるからという理由で、自分を他の人びとよりも偉大であると見なしたからである。そして不思議な仕方で、自分のもとで小さき者であるときには、主のもとで偉大であった。しかし自分のもとで偉大であると思われたときには、主のもとでは小さき者となった。

それゆえ一般に、大多数の従者によって人間の心が膨れ上がる時、かれは装飾された権力の高揚によって、傲慢さという繁栄へと向かって滅びていくのである。そのような権力を上手に治める人とは、それを保持するとともに攻撃することのできる人である。それを通して罪の上に立つことができ、それとともに他人と平等にいっしょにやطيعける人こそが上手にそれを支配する。というも、権力によって支えられないときでも、人間の精神は自慢するものだからである。高いところにいけばいくほど、権力がそれに伴ってくる。しかし、その権力を正しく分配する人とは、配慮をしながら、それが加えたものを除去することができ、それが誘惑するものに戦いを挑み、それを持ちながらも自らを他人と等しい者に見なし、罪人に対しては罰に対する熱意によって向き合うことのできる人なのである。

このことは、もし最初の牧者であるペトロの例を考察するならば、この区別がより十分に理解されるであろう。じじつペトロは、創造主の神よりも聖なる教会の首位権を保持していたが、謙虚に自分自身を投げ倒すことによって、善い行いをしたコルネリウスから過度に尊敬されることを拒んだのである。そして自らも等しいものであると認めながら言ったのである。「お立ちください。わたしもただの人間です」(使 10,26) と。しかし、アナニアとサツピラの罪を見つけたときには、すぐにかれは、どれほどの権威において自らが他人

を超えているかを示したのである。

かれは、かれらの生活を貫くような霊によって捉えたとときには、言葉によってそれに打撃を与えた。そして罪に抗することにおいては自分が教会では最高の者であることを想い起こしたのである。善き行いをする兄弟たちの面前では、かれは、自分に対して激しく求められる名声によっては、こうしたことを容認することはなかったのである。一つの例では、聖なる行為によって、平等の交わりを招来することになり、もう一つの例では、復讐への熱意が権力の義を求めることになったのである。

パウロは、善き行いをする兄弟たちに対しては、自らが卓越した者であることを意識することはなかった。「わたしたちは、あなたがたの信仰を支配するつもりはなく、むしろ、あなたがたの喜びのために協力する者です」(二コリ 1,24) と言っているとおりである。しかもそこに「あなたがたは信仰に基づいてしっかり立っているからです」と付加している。それはあたかも、自分の言ったことを次のように説明しているかのようである。すなわち、「わたしたちは、あなたがたの信仰を支配することはない。あなたがたは信仰に基づいて立っているからである。そしてわたしたちは、あなたがたが立っていることを知っている、そのあなたがたと平等なのである」と。「わたしたちは、あなたがたの間で幼子のようにになりました」(一テサ 2,7) と言うとき、自分が兄弟に対して卓越していることに気づいていないかのようである。そしてさらに、「わたしたち自身は、キリストのためにあなたがたに仕える僕なのです」(二コリ 4,5) と言っている。しかし、矯正を必要とする欠点を見出したときには、かれはすぐに自分が教師であることを想い起こして言うのである。「あなたがたが望むのはどちらですか。わたしがあなたがたのところへ鞭を持って行くことですか」(一コリ 4,21) と。

それゆえ、上に立つ者が、兄弟たちよりもむしろ悪徳を支配するとき、最高の地位はよく統率されることになる。前に置かれた者たちが、罪を犯した従者たちを正すとき、注意深く観察することが必要であり、たしかに、教えの義務によって、罪を権力の法によって罰するのであるが、謙虚さ

という保護によって、正される兄弟たちが自分と等しい者であることを認識すべきである。一般に、わたしたちが正す人びと自身を自分たちよりも沈黙の思考によって優先することはふさわしいことである。というのも、わたしたちによって、かれらの悪徳は、教えの厳しさによって叩かれるが、他方で、わたしたち自身が犯したことがらについては、たしかに、誰かから言葉による非難によって罵られることはないからである。人びとの前でわたしたちが罰せられることなく、罪を犯せば犯すだけ、主の前で一層拘束されることになる。他方で、わたしたちの教えは、かれらの罪を、罰を与えることなく見放さないならば、それだけ、神の裁きによって自由になっていくのである。それゆえ、心には謙虚さを、行為においては教えを保持しておくべきである。そしてこれらの間で、注意深く見ておくべきことは、謙虚さの徳が節度を越えて保護されると、指導の法が緩められるということである。上に立つ者が、不当に自分自身を低く評価すると、教えの鎖によって従者の生活を縛ることができなくなるからである。それゆえ、指導者は外的には自分が他者の有益のために企てたことを保持すべきであり、内的には自らの評価について恐れることを維持すべきである。しかしながら、ふさわしい仕方で明らかにされるしるしによって、かれらが自らのもとでは謙虚であることを従者には気づかせるべきである。そしてかれらが恐れているかれらの権威を見るべきであり、かれらが模倣している謙虚さを認めるべきである。したがって、上に立つ者が絶えず求めるべきことは、かれらの権力が外的に大きくなればなるほど、内的にはかれらのもとに多くのものが保たれる。かれらの思考が打ち負かされないように。心からその喜びのなかへと奪われられないように。そうでないと心はそれを支配することができず、自ら支配しようとする欲求によって仕えていくことになるからである。

じっさい、指導者の心は、自らの権力の喜びによって高慢さへと奪われていく。ある知恵者によって正しく言われている。「宴会の世話役に選ばれたなら有頂天になるな。客の一人として皆と同じようにふるまえ」(シラ 32.1)。このことからペトロも言う。「委ねられている人びとに対して、

権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい」(一ペト 5.3)。このことから、真理それ自身は、わたしたちをより崇高な徳の功績へと誘いながら言うのである。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために来たのと同じように」(マタ 20.25-28)。このことから、かれは、支配したつもりになった僕のために後に取っておかれた罰を示しながら次のように言うのである。「しかしそれが悪い僕で、主人は遅いと思い、仲間を殴り始め、酒飲みどもと一緒に食べたり飲んだりしていると。もうそうなら、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、かれを厳しく罰し、偽善者たちと同じ目に遭わせる」(マタ 24.48-51)。かれらは教えを模倣することから、指導という奉仕職を支配の使用へと向けるので、正当に偽善者と見なされる。しかしときどき、弱い人びとの間で教え以上に平等を保とうとすると、いっそうひどく罪は生ずる。

というのは、じっさい、偽りの敬虔さによってエリは罪を犯した息子たちに罰を与えることを欲さず、厳格な裁きの下で、自らと息子の双方が残酷な断罪によって打たれることになったのである。ここから、じっさい、かれに対して神の声が語られている。「自分の息子をわたしよりも大事にしたのか」(サム上 2.29)。このことから、かれは、預言者を通して牧者を非難して言う。「お前たちはこわれているものをつなぎあわすことなく、追われたものを連れ戻さなかった」(エゼ 34.4)。じじつ、追われたものが連れ戻されるのは、罪に滑り落ちた者が、牧会の配慮の力によって義の状態へ呼び出されたときである。紐がこわれたものをつなぎとめるのは、教えが罪を制するときである。もし強い包帯でつなぎとめないと、傷口から血が流れつづけ死に至るということがないためである。

しかしながら、しばしば、こわれたものは不注意な仕方をつなぎとめることによっていっそう悪

くなることもあり、あまりにも強く結びつけたことにより、傷はいつそう痛みを引き起こすことがある。このことから、従者における罪の傷を正しながら固く縛るとき、厳しさそのものが、配慮によって和らげられるべきであり、敬虔さの心を捨てないように、罪を犯した人に対して教えの法を行使することが必要である。敬虔さにおいては、指導者は従者に対して母親のように、また、教えにおいては父親のようであることを配慮すべきである。こうしたことの中で、手当は、配慮ある用心深さによってなされるべきであり、それは、教えが厳しすぎないように、また、敬虔さが緩められないようにするべきである。

じっさい、『ヨブ記講解』においてすでに述べたように、教えも共感も、それが双方を欠くならば大いに孤立したものとなる。自らの従者に対して指導者は、適切に共感によって世話をし、敬虔に教えによって厳しくすべきである。このことから、真理ご自身が教えているように、サマリア人の熱意により、半殺しになった人は宿屋へ連れて行かれ、ぶどう酒と油をかれの傷口に当てがわれ、ぶどう酒を通して傷は消毒され、油を通してなだめられるのである。傷口を治療するべき人は、ぶどう酒によって痛みを除去し、油において敬虔さのなだめを行う。ぶどう酒によって患部は清められ、油によって癒しが進行するのである。緩やかさと厳しさは混ぜられるべきである。両方から混ぜ合わせられるべきである。従者は、あまりにも粗雑に傷つけられるべきではなく、また、過度の優しさによって解放されるべきでもない。

パウロが言うように、かの契約の箱がそのことを意味している。そこには石板とともに、枝とマンナがあった (cf. ヘブ 9,4)。善き指導者の心の中に、聖なる書についての知恵とともに、もし思慮の枝があるならば、甘美のマンナも必要であろう。そのことからダビデは言う。「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける」(詩 23,4)。じじつ、鞭によって叩かれ、杖によって支えられるからである。それゆえ、叩くための鞭があるならば、支えるための杖の慰めもあるべきである。緩慢にするのではない愛はあるべきである。挑発させないような勇氣はあるべきである。節度を超えて荒れ狂わないような熱意はあるべき

である。思いとどまる人に相応しくないような敬虔さはあるべきである。指導という技芸において、義と慈悲深さが混ざり合うとき、上に立つ者は従者の心を恐れさせながらもなだめ、なだめながらも畏怖へとかれらを固定するのである。

第7章

指導者は外的なことに忙しくなっても、内的なことに対する配慮を縮小すべきではなく、内的なことに配慮しても、外的なことに對する顧慮を置き去りにするべきではない

指導者は外的なことに忙しくなっても、内的なことに対する配慮を縮小すべきではなく、内的なことに配慮しても、外的なことに對して顧慮することを置き去りにするべきではない。外的なことに専心しすぎて内的なことを崩してしまうことがないように。また、内的なことにのみ専念して、隣人のために外的に負っていることに用立てないことがないように。じっさい、しばしば兄弟たちに対しては、魂に関しては上に立っていることを忘れて、心全体で世俗的な配慮に入れ込んでいく者が少なからずいる。自分たちが居合わせているこれらのことを自分が行うことを非常に喜ぶばかりか、自分たちがいないようなことについても、昼も夜も心を混乱させるほどの熱意で燃え立っている。そしておそらくは好機は手遅れになり、そのことから休んでいると、その休むことによってますます疲れることになる。行為によって押しつぶされそうになるとかれらは快樂を感じ、地上の仕事において働いていないと、そのことで骨が折れると見なすのである。そしてこの世的な喧騒に駆り立てられていることが喜びとなると、他人を教えるべき内的なことを無視することになる。そのことから疑いなく従者の生活は怠惰なものとなる。というのは、かれらは靈的な前進を望むのであるが、上に立つ者の範例という、いわば障害に出会うからである。というのも、頭の力が弱くなれば、肢体の元氣も無駄になり、指導者が道に迷えば、軍隊は敵と遭遇してすばやく従おうとしても無益なことである。そうなると、激励されても従者の心は高まることはなく、譴責を受けてもかれらの罪が改善されることはない。というのは、

魂の保護者を通して、地上の裁きの職務が遂行される時、牧者の配慮は、群れの保護を欠くことになるからである。従者は、真理の光を捉えることはできない。地上的な熱意が牧者の意識を占めている間は、誘惑の衝撃の風により、埃が教会の目を見えなくするからである。

このような事態に対して、人類の贖い主は、わたしたちを胃の食欲さから抑制しようとして、「放縦や深酒で、心が鈍くならないように注意なさい」と言い、さらに「生活の煩いで」を追加する。そこにすぐに恐れを加える。「その日が不意にあなたがたを襲うことになる」。その到来の特徴についても知らせてくれる。「その日は、地の表のあらゆる所に住む人びとすべてに襲いかかるからである」(ルカ 21,34-35)。ここからさらに言う。「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない」(ルカ 16,13)。このことからパウロは、信心深い人びとの心をこの世の交わりから証人として呼び出し、むしろいっしょに集めて言う。「神の兵士たちよ、兵役に服している者は生計を立てるための仕事に煩わされず、自分を召集した者の気に入ろうとします」(二テモ 2,4)。このことから、かれは教会の指導者たちに、自由になることへの熱意を伝え、相談することの治癒を示して言う。「あなたがたは、日常生活にかかわる争いが起きると、教会では疎んじられている人たを裁判官の席に着かせるのですか」(一コリ 6,4) と。霊的な贈り物によって飾られることのないかれらは、地上のことがらに従事すべきである。より明白に言うならば、かれらは内的なことに入り込むことはできないので、少なくとも外的な必要なことに従事すべきであるということである。このことから、神と語るモーセは、外国人であるエテロの批判によって裁かれた。愚かな労働によって人びとのする地上の仕事に仕えたからである。ほどなく相談がかれに持ちかけられ、自分の代わりに他の人びとを、争いを収めるべく立て、自分自身はより自由になり、人びとに教育するために霊的な秘儀を認識することになる。

そういうわけで、従者によってはより劣ったことが行われ、指導者によっては最高のことが考えられるべきである。すなわち、用心すべき歩みによって先んじなければならぬ目を、埃が見えに

くくすることがないようにするためである。じじつ、上に立つすべての者たちは従者の頭である。そして、正しい足取りによって道を選ぶことができるように、たしかに頭は高いところから先を見るべきである。頭が地上に垂れ、身体のまっすぐさが曲がってしまうと、足は前進することに滞りができる。魂の指導者は、人びととともに非難すべき地上的なことがらに自らに従事しているとき、どのような精神で牧会的な地位を他の人びとに用いるべきであろうか。主は、そのことを預言者を通して、正義の応報という怒りから脅かしながら言っている。「祭司も民も同じようだ」(ホセ 4,9)。霊的な仕事を遂行する人が、今もなお肉的な熱意から判決される人びとがすることをしているとき、たしかに祭司は民と同じようである。このことは、預言者エレミヤのかの愛の大きな悲しみの中で瞑想され嘆かれたことであり、神殿の破壊に象徴されながら、かれは言うのである。「なにゆえ、黄金は光を失い、純金はさげすまれているのか。どの街角にも聖所の石が打ち砕かれているのか」(哀 4,1)。他の金属よりも輝く金とは、優越した聖性以外の何であろうか。純金とは、すべての人びとによって愛される宗教に払われる敬意以外の何であろうか。聖所の石とは聖なる階級の人びとに他ならないのではないか。街角という言葉によってこの生の幅が喩えられているのではないか。じじつギリシア語では幅はプラトスと言われ、明らかに幅によって街が意味されている。真理自身が語る。「滅びに通じる道は広々としている」(マタ 7,13)。したがって金は、聖なる生活が地上の行為で汚ればくすんでしまう。純金は、宗教的に生きると信じられていた人びとの以前の評価が落ちれば、変化してしまう。というのも、聖なる習慣の後に、地上の活動に身をまかせるとき、その色は変化し、人びとの目の前で、その敬意は軽蔑されたものとなり色あせていくのである。さらに、聖所の石が通りにばらまかれるのは、教会の装飾のために内的な神秘に専念してきた人びとが、いわば、祭壇の秘儀のようにして世俗のことがらという幅広い道を彷徨うようなときである。たしかに聖所の石を作られるが、それは聖なるものの中でも聖なるものである、最高の聖職の服のうちに現れるためである。しかし、宗教に仕

える者が、従者たちからその生き方の徳によって贖い主の誉れを求めなくなると、聖所の石は最高の聖職の服のうちにはない。じっさい、聖所の石は、聖なる階級の人びとが、自らの欲望という幅に捧げて、地上的な仕事に固着しているときには、街にばらまかれるのである。そして、これらのものが蒔かれたと言われるのは、街だけではなく、街の頂でもあることに注目すべきである。すなわち地上的なことに従事するとき、かれらは最高の地位に見えることを求めており、快樂の欲望からその街を保つとともに、聖性の栄誉から街の頂にあるようにするのである。

また、聖所の石とは、それから聖所が作られたところの石であると理解されることも妨げられないのである。それらは街の頂にもばらまかれている。それはかつては聖なる階級の人びとの仕事によって聖性の栄光が見られていたのであるが、自ら望んで、地上的な行為にはまり込むことによって生じたことである。世俗的な業務は、ときには共感をもって耐えなくてはならないが、けっして愛によって求められるべきではない。さもないと、それらに入れ込んである人の心に重くのしかかり、その重みによって天的なことから最深のところまで沈み込んでしまうのである。

しかし反対に、たしかに群れの配慮を引き受けるが、自分は霊的なものために時間を空けておくことを望み、けっして外的なことに専念しようとしない。根本から身体的なことを配慮すること無頓着な人は、従者の必要なことがらのためにけっして突進することはない。多くの場合、かれらの説教が軽蔑されることは不思議なことではない。というのも罪人の行いを罵るからである。この世の生活に必要なものをかれらに与えなければ、進んで聞かれることはないだろう。もし、共感的な手によって、自らを必要としている人の心に委ねることがないならば、教えの言葉はその人の心を貫くことはないだろう。説教する人の敬虔さが、そのことを聞く人の心に注がれるときに、言葉の種は容易に芽を出すのである。そのことから指導者は、内的なものを注ぎこむために、悪意のない思いによって外的なものを前もって見ることが必要である。また牧者は、外的な生活の配慮をないがしろにすることなく、自らの従者の

内的な生活に対する熱意に燃えていなくてはならない。

じっさい、わたしが述べたように、群れの心は、もし牧者が外的な助けを怠るならば、受け入れるべき説教によって粉碎される。そのことから最初の牧者もまた配慮しながら忠告して言っている。「さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。あなたがたに委ねられている、神の羊の群れを牧しなさい」(一ペト 5,1-2)。この箇所でかれは、勧めていることが心の養いなのか、それとも身体の養いなのかを明確にするために付け加えている。「強制されてではなく、神に従って自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためではなく献身的にしなさい」(同)。

これらの言葉によって、明らかに牧者に対して敬虔な仕方でも配慮されている。配下にいる人びとの必要を満足させる一方で、剣の野望で殺したりすることがないように。また隣人が、かれらによる肉的な助けによって元気を取り戻しているとき、牧者自身が正義のパンを奪われたままであることがないように。パウロは、牧者の配慮を力づけながら言っている。「自分の親族、とくに、家族の世話をしない者がいれば、その者は信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っています」(一テモ 5,8)。

それゆえ、こうしたことにおいて、かれらはつねに恐れるべきであり、目を覚まして注意しておくべきである。かれらが外的なことを行うことによって、内的なものへの志向が埋没していくことがないように。というのは、わたしが述べたように、一般に指導者の心が不注意にも時間的なものへの配慮に仕えるとき、内的な愛によって冷たくなってしまふからである。そして、魂の指導を引き受けたということを忘れてしまい、外に注がれたことを恐れなくなるのである。それゆえ、より外的な仕方でも、従者たちにかげられる配慮は、限度を設けることが必要である。このことからエゼキエルによって適切に言われている。「祭司は頭をそってはならない。また髪を伸ばしてはならない。頭髪はきちんと刈り込んでおかねばならない」(エゼ 44,20)。なぜなら、かれらが正当にも祭司

と呼ばれるのは、聖なることがらへとかれらを導き、信仰者の前に立つ者だからである。他方、頭髮とは、心のうちにある外的なことについての思いめぐらしである。これらのことが頭の上で無意識に生ずるのは、この世の生に対する配慮の印である。ときどき折悪しく生ずるために、意識されないまま、わたしたちも気づかないことが起こる。したがって、他人の上に立つ者は皆、外的なものへの配慮を持ちながら、しかし、それらに熱烈に心を傾けるべきではない。祭司は正しく頭をそってはならないし、髪を伸ばしてはならない。それは肉的な思いめぐらしが、従者の生活から、自らによって根本から刈り込まれるべきではなく、さらにそれが過度に成長して弛緩しすぎるべきでもないからである。このことから適切に言われている。「頭髮はきちんと刈り込んでおかねばならない」と。すなわち、時間的な関心事への配慮は、それが必要な限りで仕えるべきであり、過度に増えていかにないように、敏速に減少させるべきである。したがって、予見のある外的な管理によって身体的生活は守られ、さらに、適度の配慮によって、心の志向性は巻き込まれることはなくなり、祭司の頭の髪は、皮膚を覆うように保たれ、目を覆わないように切られるのである。

第 8 章

指導者は熱意をもって人びとを喜ばそうと求めるべきでなく、かれらを喜ばすべきことに注意を払うべきである

さらに、指導者が配慮をもって用心しておくべきことは、人びとを喜ばそうとする欲求がその人を打ちのめすことがないようにすることである。熱心に内的なものを探求する際、用心深く外的なものを供給する際、真理よりも従者によって愛されることを求めることがないように。自らの善い行いによって支えられながら、この世からは見知らぬ人と見なされる一方で、自らの愛が創造主から見知らぬ人と見なされないように。

というのは、自分が行う善き業に基づき、創造主によってよりも、教会によって愛されることを欲するならば、その人は贖い主の敵である。というのは従者は、もし花婿がそのお方を通して贈物

を送ったのに、花嫁を喜ばすことを求めていたのであれば、姦淫の罪を犯したことになるからである。たしかに、自己愛が指導者の精神を捉えたとき、ときにかれが無秩序な放縦さへと駆り立て、ときに粗暴さへと駆り立てるのである。

というのは、自己愛によって指導者の精神は放縦へと向かうからである。というのは、罪を犯した従者を見ても、この人に対するかれらの愛が弱くならないように、かれらを正すことをしなくなるからである。非難すべき従者の過ちを時々姦淫によってなでおろすのである。このことから預言者によってよく言われている。「災いだ、人びとの魂を捕えようとして、どの手首にも呪術のひもを縫い付け、どんな大きさの頭にも合わせて呪術の雑巾を作る女たちよ」(エゼ 13.17)。

「どの手首にも呪術のひもを縫い付ける」とは、その正しさから落ちていく、この世の喜びにおいて傾いていく魂をへつらいの姦淫によって慰めることである。かれが罪を犯しても厳しい批判がなされず、好意による優柔不断さがかれに適用され、何ら辛辣なことがかれを襲わないとき、人は手首に呪術のひもを縫い付けられ、頭に呪術の雑巾を作られたようなものである。

しかし自分自身を愛している指導者は、疑いなく、かれらにそのようなことを行うが、それは、かれがこの世的な栄光に対する熱意においてかれらの妨げになっていることを恐れるからである。じっさい、かれらに対して何もしようとしませんが、たしかに、いつでも厳しく批判して圧力を加え、けっしてやさしく忠告することなく、牧会的な柔和さを忘れ、支配という法で恐れさせるのである。神の声がそのような人びとを正しく預言者を通して咎めて言う。「かえって力づくで苛酷に群れを支配した」(エゼ 34.4)。自らの創造主よりも自らを愛し、自慢して従者に対して自らを高め、行うべきことではなく、自分ができていることに注目する。来たるべき裁きを恐れることなく、時間的な権力について不敬虔に誇る。喜ばすことは、自由に誤ったことをし、従者の誰もが反対しないことである。それゆえ自分は邪悪なことを行う。しかも他人がそのことに黙っていることを望む人は自分に抗する証人となる。というのは、真理がかれに抗して守られることを欲する以上に、自らが愛されるこ

とを欲するからである。

たしかに、ある程度の罪を犯さず生きる人はいない。それゆえ、かれは自分自身よりも真理が愛されることを望み、誰からも自分が真理に抗して思いとどまるようにする。このことから、ペトロはパウロの批判を喜んで受け入れた (cf. ガラ 2,11)。同様に、ダビデは従者の非難を謙虚に聞いた (cf. サム下 12,7)。というのは、善き指導者は、自己愛によって自らを愛することを意識せず、従者による自由で敬虔な言葉を謙遜さへの従順と信ずるからである。しかしこうした中で、指導職は、非常なる統治の技芸によって行われることが必要である。従者の精神は、自分たちがあることについて正しく意見を述べるができること、表現の自由が与えられるが、しかしその自由は高慢にいたるものではない。そうでないと、節度を欠いた言葉の自由がかれらに許されると、かれらから生活の謙虚さは失われるからである。また、善き指導者は人びとを喜ばすことを求めるべきであることを知らなくてはならない。しかしそれは、自らの評価という甘美さによって、隣人を真理への愛へと引き寄せるためであり、自分が愛されるのを求めるのではなく、自分の愛が何らかの道となり、それを通して聞く者の心を創造主への愛へと導くのである。たしかに、どんなに正しいことを告げようとも、愛されていない説教者が喜んで聞かれることは難しい。それゆえ、上に立つ者は、自らが愛されることを求めるべきである。それはかれが聞いてもらうためであるが、自らのためにその愛を求めるべきではない。その職務を通してかれが仕えていると考えられている神に、かれの考えの隠れた部分が残虐に反抗することが見い出されないようにするべきである。パウロはわたしたちの自らの努力の隠れた部分を明らかにしたとき、適切に次のことを挿入している。「わたしも…すべての点ですべての人を喜ばそうとしているのですから」(一コリ 10,33)。しかしさらに続けて言う。「もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません」(ガラ 1,10)。パウロは喜ばせもするし、喜ばせないこともする。かれが喜ばせようとして求めているのは、自らではなく、自らを通して人びとが真理を喜ぶことなのである。

第9章

指導者が念入りに知っておくべきこと、それは、悪徳がしばしば美徳の偽装をするということ

指導者はまた、悪徳がしばしば美徳の偽装をするということを知らなくてはならない。というのも、しばしば儉約という名のもとに、貪欲さは自らを隠すことがあるからである。浪費は、自らに抗して気前よさという呼称で自らを隠すことがある。しばしば秩序を欠いた赦しは親切さと信じられることがある。節制のない怒りは霊的な熱意という徳と見なされることもある。しばしば軽率な行為は速さへの効率性と、また行いの緩慢さは重たい深慮さと見なされる。このことから、魂の指導者は、用心深い配慮によって美徳と悪徳を区別する必要がある。貪欲さが心を占めているのに、自分は儉約であると見られることに踊りながら喜ぶことがないように。浪費して失われたのに、自分は憐れんで気前がよかったと吹聴することがないように。罰すべきことを赦してしまい、永遠の罰へと従者を連れていくことがないように。罪を犯したことを無慈悲に罰して、かれ自身が一層重い罪を犯すことがないように。正しくかつ重大に行われうることを、軽率に先走って削いでしまうことがないように。善い行いの功績を先延ばしにして、悪化したものに変化することがないように。

第10章

指導者の賢慮は、譴責、偽り、呵責、親切さに属するべきであること

ときどき、従者の過失は、賢慮をもって見逃されるべきであり、ただ、どうして見逃されたかは知らされるべきであることを理解する必要がある。ときどき、公けに知らされていることもまた、賢明な仕方で大目に見られるべきであり、他方で、隠れていることでも、繊細にくまなく調査すべきである。ときには穏やかに批判し、ときには強烈に叱責すべきである。わたしが述べたように、たしかにあることがらについては、大目に見られるべきであり、ただ大目に見られた理由については

知らされるべきである。罪を犯した者は、自分が見つかったが大目に見られたことを知り、自らが沈黙のうちに、寛大に見逃されたことを考慮に入れて、罪を積み重ねることを恥ずかしく思い、指導者は優しく忍耐をもって対処するために、自分で自分を罰することになる。そのような寛大な措置によって、主は、相応しい仕方ユダヤを批判して預言者を通して言う。「お前は欺くのか。お前はわたしたちを心に留めず、心にかけることもしなかった。わたしがとこしえに沈黙していると思っているのか」(イザ57,11)。それゆえ、主はユダヤの過失を大目には見たが、ユダヤが罪を犯していることは知らせているのである。罪人に対しては黙っていたが、黙っていたことについては語った。

公けに知られていることがらにおいても、賢慮をもって見逃されるべき場合がある。公けに批判されることが相応しくないようなときである。じっさい、傷はタイミング悪く切開されると、一層ひどくなる。そして治療の時期が相応しくないと、治療という任務が無効になってしまうことは確かである。しかし、従者の批判のために時が求められるとき、かれらの罪の重みに対する上司としての忍耐が示される。このことから、詩編作者を通して、適切にも言われている。「罪を犯す者はわたしの背中を耕した」(詩129,3)と。というのは、わたしが荷を背負うのは背中だからである。したがって、罪人が自分の背中を耕したと嘆くのは、「正すことができなかつた者たちを、上に重ねながら重荷として運んでいる」とはっきりと言っているかのようである。

他方で、隠れていることでも、繊細にくまなく調査すべき場合がある。ある兆候が急に現われ、指導者は、従者の心のうちに閉じたままになっていた隠れていたものをすべて見つけ、時宜を得ながら批判して、些細なことより大きなことを認識していくのである。そのことからエゼキエルに対して正当に言われている。「人の子よ、壁に穴をうがちなさい」(エゼ8,8)。そこに同じ預言者が付け加える。「壁に穴をうがつと、そこに一つの入り口があるのではないか。かれは、『入って、かれらがここでやっている邪悪で忌まわしいことを見なさい』と言った。入って見ていると、周り

の壁一面に、あらゆる地を這うものと獣の憎むべき像、およびイスラエルの家のあらゆる偶像が彫り込まれているのではないか」(エゼ8,8-10)。エゼキエルによって、上に立つ者の姿が象徴されており、壁によって従者の頑固さが象徴されている。壁に穴をうがつこと、それは鋭い詰問によって心の頑なさを開けることに他ならないのではないか。そして穴をうがったとき戸口を開く。熱烈な尋問であれ寛大な咎めであれ、心の頑なさが切り開かれひとつの入り口が示され、そこからすべての内的な思いが見られるのである。そのことから次の言葉が続く。「入って、かれらがここでやっている邪悪で忌まわしいことを見なさい」と。いわば、かれは忌まわしいものを見るために入り、外的に現われた何らかのしるしを吟味しながら、従者の心に入り込み、不正に考えられていたすべてのことがらがかれに知られることになる。そのことから預言者は付け加える。「入って見ていると、周りの壁一面に、あらゆる地を這うものと獣の憎むべき像が彫り込まれているのではないか」と。あらゆる地を這うものによって、地上的な思考が意味されている。他方、獣によってある程度は地表からあがったが、なおも地上的な報酬を求めている思考が意味されている。じっさい、地を這うものはその体全体が地上にくっついていますが、獣は地表からあげられており、ただ食欲のために常に地に傾いているのである。そのことから、壁の中にいるのは地を這うものであり、心のうちにその考えは巻き起こるが、けっして地上の願望から上にあがることはないのである。獣もまた壁の中にいる。たしかに、その考えの幾分は正しく幾分は立派なものであるが、求める者が時間的で名譽的な利益に仕えているために、それ自体は地上には上がっているものの、いわば食欲のために低いものを求めて身をかがめながら歩き回るのである。このことから適切にも次のように加えられている。「イスラエルの家のあらゆる偶像が彫り込まれているのではないか」と。たしかに、次のように書かれている。「食欲は偶像崇拜にほかならない」(コロ3,5)。それゆえ、獣の後に偶像が書かれているのは正しいのである。というのも立派な行為によって、ある者たちはいわば地面から立ち上がるが、ほめられない野望によって地

へと低めてしまうからである。「彫り込まれている」と言われているのは正しいことである。外的なものが内的なイメージで引き出される時、いわば像を作りながら、あれこれ思いをめぐらしながら、考えられたものが心のうちに彫り込まれるからである。したがって、まずは壁の穴が、ついで戸口が見つけれられ、それからやっと隠れた邪悪さが示されるのである。というのは、あらゆる罪のしるしはまずは外的に現われ、ついで開かれた不義の戸が示され、そして最後に中に隠れているすべての悪が明らかにされるからである。

しかしあることがらについては穏やかに批判すべきである。じっさい、悪意によってではなく、ただ無知や弱さによって罪を犯した場合には、明らかに大いに緩和しながら、罪の非難が調整されることが必要である。たしかに、わたしたちもまたこの死すべき肉をこうむっているからには、わたしたちの壊敗という弱さのうちに横たわっている。それゆえ、各人は自分のことから、他人の弱さにどれほど共感すべきかを思い量るべきである。隣人の弱さに抗して非難の声を向けて猛烈に突進し、自分のことを忘れていると思われなためである。このことからパウロは適切に忠告して言っている。「万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、霊に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい」(ガラ6,1)。それは明らかにこのように言っているかのようである。「あなたが見ている他人の弱さが気に入らないとき、あなたが何者であるかを考量しなさい。霊が自分に対して非難することを恐れながら、霊が批判しようとする熱意を調整してくださるように」と。

他方で、厳しく非難すべきことがらもある。罪がそれを犯した人によって認識されていないときには、それがどれほどの重さのものであるかを、非難する者の口によって知らせることが必要である。また、ある人が、自分が行った悪を軽減しているときには、かれに対して、罰する人の荒々しさをもって重い恐れを抱かせるべきである。上の祖国の栄光を説教の声を通して示すことは指導者の義務である。この世の旅において、昔からの敵のどれほど大きな誘惑が隠れているかを明らかに

すること、また、穏やかに耐えるべきでない従者の悪を熱意の大きな厳しさによって正すことも義務である。罪に対してほとんど熱せられることがないと、罪人がすべての罪科から免れることになるからである。

そのことからエゼキエルに対して適切に言われている。「れんがを一つとって目の前に置き、その上に都であるエルサレムを刻みなさい」と。そしてすぐに加えられている。「そして、これを包囲し、これに向かって堡壘を建て、壘を築き、陣営を敷き、破城槌を周囲に配備しなさい」と。そして自分のための防御のためにさらに加えられる。「自ら鉄の板を取り、それを自分と都との間に鉄の壁としなさい」(エゼ4,1-3)。

さて、預言者エゼキエルはどのようなタイプか、教師のタイプではないか。かれはこのように言われている。「れんがを一つとって目の前に置き、その上に都であるエルサレムを刻みなさい」と。たしかに、聖なる教師は、聞く者の地上の心に、教えて理解させようとするときれんがを置くからである。かれらが自分の前に、そのれんがを置くとき、心をまったく集中させてそれを見守るからである。そこにエルサレムの都を描くように命じられる。地上の心に説教することによって、天上の平和の像を示すことに非常に注意しながら配慮すべきだからである。しかし、天上の祖国の栄光は、どれほど力強い敵の誘惑が襲ってくることを学んでいないならば、気づかれても無益であり、次のように付加されている。「これを包囲し、これに向かって堡壘を建てなさい」と。たしかに、聖なる説教者は、エルサレムの都を描くれんがの周りを包囲する。そのとき、地上的であるが、すでに天上の祖国を必要としている心に対して、この世での悪徳による逆境がどれほどのものであるかを証明するのである。じじつ、各々の罪は、前進しようとする人びとに対して、どのように待ち伏せしているかを示すとき、それはまるで、説教者の言葉によってエルサレムの都の周りを包囲することが命じられているかのようである。

しかし、どれほどの悪徳がわたしたちを襲ってくるかだけでなく、どれほどの徳がわたしたちを守り、強めてくれるかを知るべきであるので、正しく次のように加えられている。「これに向かっ

て堡壘を建てなさい」と。たしかに、聖なる説教者は、どれほどの徳がどれほどの悪徳に対置していることを示そうとするとき堡壘を建てる。そして一般的に徳が成長するにつれ、誘惑の戦いも増長するので、正しく加えられる。「壘を築き、陣営を敷き、破城槌を周囲に配備しなさい」と。じっさいある説教者は、増長する誘惑の塊を知らせるとき壘を築く。そして正しい志をもった聴衆に対して、力強い敵の用心深く理解しがたい陰謀を説教するとき、エルサレムに対して陣営を敷くことになる。しかし、誘惑という刺が、この世においてわたしたちを至るところから取り囲んでいて、徳という壁に穴をあけようとしていることを知らせるときに、破城槌を周囲に配備することになる。

しかし、指導者が詳細にこれらのことをことごとく示そうとしても、各人の罪に対して、それと競争する霊によって燃えていないならば、かれは永遠に対する赦免を調達することはない。このことから、さらに正しく加えられている。「自ら鉄の板を取り、それを自分と都との間に鉄の壁としなさい」と。たしかに、板（鍋）によって心を燃やすことが、他方、鉄によって非難の強さが示されている。神に対する熱意以上に教師の心を強烈に焙り、激しくするものはあるだろうか。このことから、パウロはこの板（鍋）を燃やすことについてこう言っている。「だれかが弱っているならば、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくならば、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」（二コリ 11,29）。そして、ある人が神に対する熱意によって火がついたのであれば、怠慢によって罰せられないように、強い永遠の保護によって壁をつくるのである。正しく次のように言われているとおりでである。「それを自分と都との間に鉄の壁としなさい」と。鉄の板（鍋）とは、預言者と都の間にある鉄の壁である。じじつ、指導者が強い熱意を示すとき、やがてこの熱意がかれらと聞き手との間に強い壁を築くことになる。非難することに怠慢になって、懲罰に際して奪われることがないように。

しかしこれらのことについては、教師の心が非難することへと駆り立てられるとき、時として言うべきでないことを急に口にしてしまわないようにすることは、非常に難しいことであることを

知っておくべきである。

よく起こることであるが、従者の過失が激しい罵りによって正されるとき、教師の舌は過度の言葉へと駆り立てられる。非難は適度を超えて行われると、罪を犯した者の心は絶望によって押し潰される。そのことから憤慨した指導者は、自分がなすべき以上に従者の心を傷つけることに考慮しながら、自分のもつねに悔恨へと避難することが必要である。それは、真理の面前で悲しみを通して赦しを得るためである。それはかれが罪を犯したのは、その熱意への欲求によるものであるから。主はモーセを通してこのことを比喩的に教えて言う。

「隣人と柴刈りに森の中に入り、木を切ろうと斧を手にして振り上げたとき、柄から斧の頭が抜けてその隣人に当たり、死なせたような場合である。かれはこれらの町の一つに逃れて生き延びることができる。復讐する者が激昂して人を殺した者を追跡し、道のりが遠すぎるために、追いついてかれを打ち殺すことはあってはならない。その人は、積年の恨みによって殺したのではないから、殺される理由はない」（申 19,5-6）。

たしかに、わたしたちは従者の罪を見ようと向かうごとに、友だちと森の中に入って行く。そして罪を犯した者の過ちを敬虔な思いで切り取るならば、純真に柴を刈ることになる。しかし、非難が必要な枠を超えて荒々しくなるとき、斧を持つ手は上方に向かっていく。そして非難の言葉がさらにきつくなると、鉄は柄から抜けてしまう。そして言われた言葉の打撃によって、愛の霊によって自らの聞き手を殺すとき、友だちを倒し殺すのである。もし、この限度を超えた非難が必要以上に課せられると、非難された者の心は不意に憎しみを生じるのである。しかし、隣人を殺すほどに不注意にも木を切る人は、三つの町に逃げる必要がある。それらのうちの一つに守られながら生きるためである。もし、その人が痛恨の悲しみへと向かい、信仰、希望、愛の下で sacrament の一致のうちに隠れるならば、人殺しをしたという咎は保たれることはないだろう。そして殺された者の近親者がかれを見つけても殺さない。というのは、厳格な裁き主がやって来るとき、かれはわたしたちの本性に仲間入りすることにより、自らを

わたしたちと一つにしたのであるが、そのかれは疑いなく有罪にすることを求めず、信仰、希望、愛によってその恩恵の下で隠すからである。

第11章

指導者は聖なる律法の理想に集中すべきであること

恐れと愛をもって上からの霊によって吹き入れられながら、指導者が勤勉に、毎日、聖なる言葉の教えを瞑想しているならば、これらすべてのことはふさわしく行われることになる。神的な忠告の言葉は、配慮の力と、絶えざる人間の会話の使用によって破壊される天的な生活に対する予知的な細心の注意をかれのうちにとっておくために必要である。人生の長期間を世俗的な社会で送ってきた人は、霊の祖国への愛に向かって痛恨の風によって新たにされなくてはならない。人間の言葉の中で心は大いに衰えていく。そして外的な暴風によって崩れていくことが疑いなくあるとき、教育への熱意によって立ち上がることを絶えず求めるべきである。このことから、群れの上に立つ者である弟子にパウロは忠告して言う。「わたしが行くときまで、聖書の朗読に専念しなさい」（一テモ 4,13）。このことからダビデは次のように言う。「わたしはあなたの律法をどれほど愛していることでしょうか。わたしは絶え間なくそれに心を砕いています」（詩 119,97）。

こうした理由から、主は箱を運ぶことについてモーセに命じて言う。「四つの金環を鑄造し、それを箱の四隅の脚に、すなわち、箱の両側に二つずつ付ける。箱を担ぐために、アカシヤ材で棒を作り、それを金で覆い、箱の両側に付けた環に通す。棒はその環に通したまま抜かずに置く」（出 25,12-15）。

箱によって他ならぬ聖なる教会がたとえられているのではないだろうか。四つの角に四つの輪を取り付けるように命じられたのは、四つの世界の部分へと広げられながら、疑いなく、四つの福音書の本で装備されることが述べられているからである。そして、木の棒が作られ、運搬されるために輪に挿入される。というのは、強く忍耐強い

教師は、いわば朽ちることのない棒のように求められるべきであり、絶えず聖なる巻物の教育に固着しながら、聖なる教会の一致を宣言し、いわば棒を輪に入れながら箱を運ぶのである。棒を用いて箱を運ぶことは、善き教師によって聖なる教会を、信仰を有していない未熟な心に説教することによって導くことである。

さらに、金色のものによって行うように命じられた人は、説教によって他人に響かされるとき、かれらもまた生活の輝きによって光るということである。かれらについては適切に言われている。「棒はその環に通したまま抜かずに置く」と。というのは、説教の職務に専念する人は、聖なる書物への熱意から外れることがないことが大いに必要だからである。じじつこのことのために、棒は輪の中にあることを命じられ、箱を運ぶ必要が生じたときには、挿入した棒によって遅れが生じないようにするのである。すなわち、牧者が従者から霊的なことについて問われたとき、もっとも恥ずべきことは、かれらが問いに答えるまにそのときに、学ぶことを求めているということである。しかし、棒が輪にくっついているべきで、教師は常に心のうちに聖なる言葉を瞑想し、遅れることなく契約の箱を持ち上げるべきである。何か必要があるときにはすぐに教えるのである。そのことから適切に、教会の最初の牧者は他の牧者たちに忠告して次のように言う。「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい」（一ペト 3,15）。それはあたかも、「箱を運ぶのに、遅れによって妨げられないように棒は輪からけっしてはずさないように」と、はっきりと言っているかのようなのである。

註

- (1)ここに訳されたものは、大グレゴリウスの『牧会規定』の第2部「牧会者の生活」である。翻訳に際しては、Sources Chrétiennes 381, Grégoire Le Grand, Règle Pastorale を使用した。

Gregory the Great, *Pastoral Rules*, II

Kikuchi, Shinji*

ここに翻訳されたのは、ラテン四大教父の一人であり、6世紀から7世紀初頭にかけて活躍した教皇グレゴリウスI世（大グレゴリウス）が執筆した『牧会規定』の第2部である。

第1部では牧会者を目指すべき人に対する心構えが述べられていたのに対して、第2部では、じっさいに牧会者として生活している者がどのようなことに心がけなければならないか、ということが十一章にわたって記されている。

そこでは、牧会者は生活において模範的であること、思索において純粹であること、外的な生活と内的な生活の両方をバランスよく保たなければならないこと等が主張されるとともに、従う者に対して指導者として心がけなければならないさまざまなことについて触れられている。最後には、指導者自身が瞑想に集中しなくてはならないことが強調されるのである。

キーワード：魂の配慮、指導職、牧会的配慮

